道標

2011.1.16

私にとっての愛媛

移民史研究の入り口

村川　庸子

敬愛大国際学部教授

生まれて6年を大阪で、小中高の12年を今治で過ごし、その後、上京しましたから、東京での暮らしも40年近くなります。それでも「出身は」と尋ねられると、「愛媛」と答えてしまうのはなぜでしょうか。1年に2、3日、戻るかどうかですから、今治では時々道に迷います。東京に帰ると心底ほっとします。それなのに「出身は愛媛」なのです。地方出身の友人たちに聞いてみたら、皆、同じ状況のようで、「われわれのアイデンティティー、帰属意識は高校生のころに形成される」と教えてくれた人もいました。

幼い娘を連れて今治に帰ったことがあります。ランニングシャツに半ズボン、バケツと魚捕りの網を持った男の子2人に出会いました。その素朴な姿に「まだこんな子がいるのね」。その瞬間、膝の上の娘の声に驚きました。「ああ、田舎の子が」。「田舎の子って。じゃあ、あなたは何？」「東京の子よ」。娘は胸を張りました。その時まで私は、彼女が私と同じアイデンティティーを持っているものと信じていました。娘の答えは無理もありません。彼女にとって今治はたまに訪れるだけの場所だったのですから。私はそのころからアメリカへ渡った移民の歴史を勉強していました。アメリカで育つ2世を見ていた1世の気持ちを想像しました。少々寂しい瞬間でした。

愛媛には、もうひとつ、第2の故郷と言うべき場所があります。アメリカ移民の送出地（特に、米国の移民制限政策の中で〝密航〟者を多く出した）ということで、大学院のころに通った八幡浜です。おいおいに話していこうと思いますが、それまで続けていた日米外交の歴史から離れ、民衆史の世界に入っていった、私にとっては大きな転換点でした。

生後6カ月の娘を背負って八幡浜の穴井を訪ねた日の記憶は、今も鮮やかです。夕闇迫る中、ゆったりと沖合を眺めていた2人の老人に声をかけました。「あの、この辺りは昔、アメリカへ行かれた方が多いと聞きましたが」「おお、わしらも行ったよ」「普通に行ったのではなくて、密航した方がいるって聞いたんですけど」「おお、わしらも密航じゃ」。あっけらかんとした答えが返ってきました。「そのころのお話をうかがいたいのですが」「ああ、ええよ」

その日から、長期の休暇ごとにかの地を訪ねました。調査結果は1987（昭和62）年、「アメリカの風が吹いた村　打瀬船物語」（愛媛県文化振興財団）として公刊しました。タイトルは、当時の村の状況を「昔、アメリカ熱がありましてな。『アメリカの風が吹いた』とも言いよりました」と語ってくれた方の言葉に託しました。企画段階からお手伝いしてきた、国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）の移民展示「アメリカへ渡った日本人と戦争の時代」（4月3日まで開催）の戦前のコーナーでも、八幡浜地域からの移民を取り上げました。

ひょんなことから、当コラムを分担することになりました。私にとっても「愛媛」を見直すチャンスかもしれません。またお目にかかります。

（むらかわ・ようこ、今治市出身）

ふるさと伝言